

高原のサナトリウムに足跡を残した著名人たち

装丁家・エッセイスト

荒川 じんぺい



僕は平成2年に森暮らしをと、八ヶ岳南麓の森へ山小屋を作った。辺鄙な森に住んでは仕事にならず、都心の仕事場と週末の森との往復生活になった。原稿データがインターネットで簡単にやり取りできるようになると、生活のすべてを森に移した。

暮らしの営みの中では、どこに住もうが怪我や病気をやる。麓にある病院に、ときどきお世話になった。この病院が、かつて高原のサナトリウムと呼ばれた結核専門の療養所だったのである。病院の奥まった庭の一角には、大正15年に建てられた本館も残り、二階には名ばかりの資料館があった。その貧相な展示室を見て、僕の文学的興味が湧き上がってしまった。僕は、その資料館の資料の整理と展示の一切を任せてもらえないだろうか、院長に手紙を書いた。旧富士見高原療養所資料館館長として「高原のサナトリウム」に関わるようになった経緯である。

結核専門の療養所として有名だった富士見高原療養所の設立は、大正15年12月に遡る。大正の末期、富士見村(長野県諏訪郡富士見町落合)の村民たちは、病気になると村内の二軒の開業医を頼りにしていた。だが、大病になると諏訪や松本まで出掛けなければならない不便をかこっていた。村の有志たちが総合病院開設を提唱すると、病院開設の気運が高まった。有志たちは、地元出身の慶應義塾大学医学部精神科教授 植松七九郎博士への伝を頼り相談した。植松博士は「私は門外漢」と、免疫学を学び結核治療に詳しい同医学部内科教室にいた正木俊二助教授を紹介した。

正木俊二は長野県上田の生まれだが、父直太郎は、独乙協会中学校の教師になるために東京転勤となった。家族一同で上京、俊二は独乙協会中学校から一高、東京帝国大学医学部に入学。卒業の際には、恩賜の銀時計を受けた秀才だった。卒業後、東京帝国大学、青山胤通の内科教室の助手として働く。翌大正5年、福島市福島共立病院副院長内科部長として赴任。この時代に、後に患者となり高原療養所が終焉

の地になった竹久夢二と、夢二絵画の頒布會にて出会ったのである。以後友として交わった。

大正9年5月、パリのパスツール研究所に留学し免疫学を学んだ。この間に、ヨーロッパ最大の山岳サナトリウムのメッカであったスイス・ダボスに視察旅行をし、当時の高度結核治療を体験した。大正11年7月、正木俊二はフランスより帰国。慶應義塾大学医学部内科教室の講師に就任した。ただし、慶應義塾大学内科には、「結核の病床」はなかった。不如丘にとって結核を治療する機会もなく物足りなさを感じていて、無聊の慰めにと小説を書いたと後述している。新聞の懸賞小説に当選し、ついで朝日新聞の連載小説で作家として世に出た。ペンネームを不如丘山人と称し、正木不如丘が通り名になった。夏休みに執筆したのが『診療簿余白』で、後に作家として二足の草鞋を履くことになった。そして、富士見村の病院開設の相談にのったのである。

大正15年12月、株式会社富士見高原療養所は、二万坪の敷地に開所された。療養所の所長に就任した不如丘は、肺病を恐れる地元住民に配慮し、総合病院として内科・外科・産婦人科・皮膚科・眼科を標榜した。各科医局を伴いこの地に赴任したのである。

富士見高原を、療養地として理想的な環境と着眼した。フランス留学で体験したスイス・ダボスの結核サナトリウム群の環境を、富士見高原に重ねていたのだ。だが、経営は厳しく、高原療養所の名を広めるために長野県佐久の同郷出身で作家仲間の久米正雄に、療養所を舞台にした小説「月よりの使者」の執筆を依頼した。昭和8年月刊誌の新年号から9月号に連載されると、大人気になった。翌年、同名の作品が女優入江たか子により映画化されて人気を博し、富士見高原療養所の名も全国的に知れ渡った。このヒットに映画各社は競うように恋愛映画の舞台として療養所を選んだ。モダンな建物が並ぶ富士見高原療養所は、様々な映画の撮影に使われた。高原

療養所は全国に知られ、多くの人々が療養に来るようになった。開所以来の入院台帳が残されており、その中には多くの著名人の名前が正木不如丘所長により記録されていた。

文学では、正木文学の理解者であった文藝春秋社長で作家の菊池寛が、藤沢恒夫（たけお）の入院を勧め院長に紹介した。藤沢恒夫は、昭和5年から昭和8年と3年あまり療養している。その間、菊池寛が入院費の足しにと新聞小説連載を紹介し、療養しながら新聞小説「街の灯」を執筆した。文化人が多く療養したのも、不如丘と菊池寛の経営戦略と推測するところである。

横溝正史は、昭和8年に入所し、一度退所したものの、翌年には、諏訪湖畔にある不如丘の屋敷の離れに家族共々住み、その後町内に移転し療養しながら小説を書いた。

竹久夢二は、昭和9年正月5日、永年の友人だった不如丘の訪問診察を受け、療養を勧められた。1月19日富士見高原療養所に入所。不如丘は、夢二のため最上級の病室を用意し、療養費は無料で優遇した。夢二は、誰とも面会せず治療に専心したが、同年9月1日に数え五十歳で亡くなった。富士見高原療養所は終焉の地になったのである。

堀辰雄は、昭和5年10月大咯血し、芥川龍之介を通じて親交のあった藤沢恒夫の勧めにより昭和6年3月入所。2カ月半程の療養生活をした。堀辰雄と軽井

沢で出会った矢野綾子は、昭和10年に結核治療のため富士見高原療養所に来所。二人は婚約者として同室での療養を望んだ。が、「たえ夫婦であろうとも、同室での療養は認めない」との、不如丘の言葉に諦める。彼は、彼女の入所1カ月後、昭和10年7月4日に二度目の入所となった。別室にて療養したが、5カ月後の12月6日に綾子は亡くなった。その1カ月前の11月3日に堀辰雄は退所していた。この体験から『風立ちぬ』が生まれた。純愛の神様のように読者に支持される作家だが、調べるほどにこの人ほど虚像と実像の差が激しい作家はいなかったのではないだろうか。

昭和の棋聖と称され戦後日本囲碁界を牽引した、呉清源も療養していて作家の川端康成が度々お見舞いに訪ねて来ていた。戦後も、山岳文学の山口耀久、随筆家の伊藤礼、童話作家で詩人の岸田衿子と多くの作家が療養した。

その療養所の本館富士病棟は、平成24年9月、地域医療の拡充のための病棟建設用地として、86年の歴史を閉じ解体された。新病棟が完成し、周辺整備が済む数年後には、資料館は復元される計画である。

平成25年3月、東京・椿山荘を会場に開かれた結核予防全国大会で、こうした話を講演させて頂いた。だが、ご臨席の秋篠宮妃殿下を始め大勢の聴衆を前に満足な講演が出来なかったことをこの場をお借りし、陳謝するところである。



富士見高原療養所と著名人たち